

# SDGs時代の教育を創る

手島利夫・ESD・SDGs推進研究室室長

知識があふれ「学力」が役に立たない時代

西暦2000年ごろを境に世界は工業化時代から、グローバルなIT化社会に変わり、時代が求める資質や能力も大きく変わってきた。その激変の中でも、日本の教育は学力の向上ばかりを追い求め続け、世界からもアジアからも20年以上も遅れてしまった。その遅れをいまだに前時代の「学力向上」で取り戻そうとしているのは的外れである。

時代が求める学びの姿

世界が激変を続けるSDGs(持続可能な開発目標)時代では、目の前の世界の現実に真正面から向き合い、その問題点に気付き、在るべき姿の実現を求めて取り組まなくてはならない。それには、必要な情報を集め、視点を持って整理・分析し、協議し、判断し、行動し、発信するという「主体性を持った学び」の経験こそが求められているのである。

その際、「総合的な学習(探究)の時間」を中心に、教科・領域での学びをもつなげ、活用していく教科等横断的な視点も欠かせないのである。形だけの主体的学習

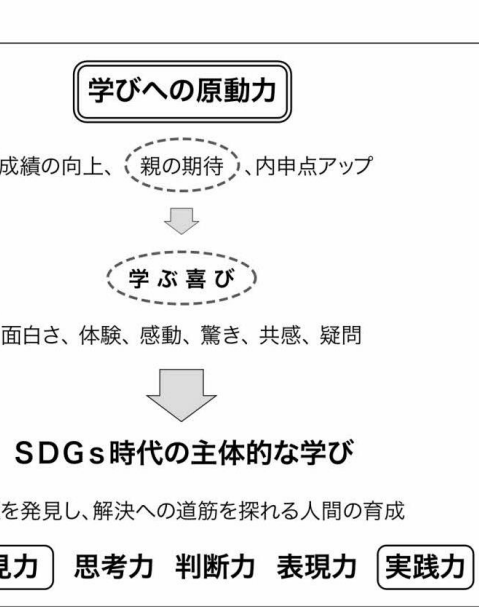


近年の学校教育では「調べ学習」という、一見すると主体的に見える学習モデルを取り入れてきた。しかしそのほとんどが、教師や教科書が与える課題について調べさせ、まとめ、発表させるものでしかなかった。そのような「調べ学習」の中で育った学生たちは「私たちは教師のやりたい問題について調べさせられていただけで、自分が問

題意識を持って取り組んでいたわけではない。例えば環境問題を調べたからといって、自分の環境に関する考えが深まったわけでもなかった」と語っている。

調べ学習の成果も、まとめの見栄えや発表の見事さで評価され、その上位者がステージでの発表に送られたり、あるいは表彰されたりし、それが内申点につながっていることを子どもたちは見抜いていたのである。「その学びを通じてどのような成長や行動の変容があったのか」「深い学び」の具体的な姿であり、評価の視点でもあるのに、全く残念なことである。

学びへの原動力から考える

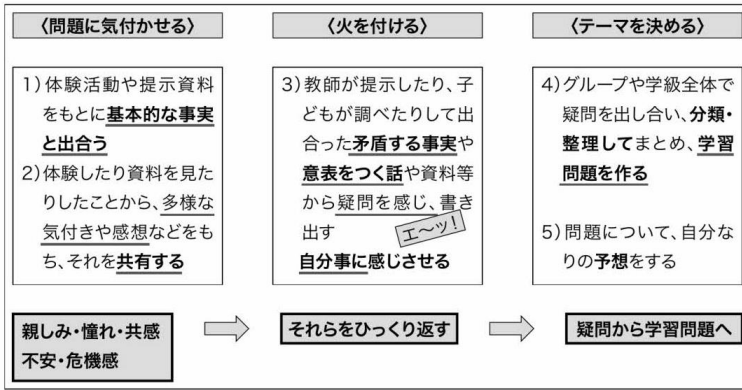


成績の向上や内申点のアップなど「親の期待に答えようとする」外的な要因から学びを動機付けるだけではなく、学びそのものの面白さや、体験を通じた感動、あるいは予想をひっくり返されるような驚くべき事実との出会い、驚きを超えた共感や納得、出し合った疑問を整理した時に見えてくる根本的な疑問や課題との出会いなど「学ぶ喜び」に働き掛ける指導の在り方こそが重要なのではなからうか。彼らの内的な動機に対して揺さぶりを掛けることによつて本音で、知りたい・調べたい・学びたいという強い意欲が生まれ、それが主体的な学びで重要な「問題発見力」や「実践力」の育成にまでつながるのである(図1)。

「子どもの学びに火を付ける」

主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、問題解決型の学習過程を進めるには「調べる」「ま

〔図2〕「子どもの学びに火を付ける」際の3つのステップ



「子どもの学びに火を付ける」具体例

とめる・実行する」「伝え合う」という活動の前に、学びの出発点として「学びに火を付ける」という導入段階を設ける必要がある。基本的には、「問題に気付かせる」「火を付ける」「テーマを決める」という三つのステップ（図2）を踏みながら単元全体に関わる基本的な知識を得ると同時に大きな問題意識を共有し、自分たちの学習問題としてまとめることで、その後の学習を方向付けるのである。

例えば、小学4年生の社会科「水と私たちの暮らし」の学習であれば、断水が続いて困っている報道資料を示し、「どんな状況だろうか」「〇日も水が使えない中でどんなことに困っているのだろうか」など

問い掛け、一人一人が考え、書き出したメモを基に仲間と話し合つてイメージを広げたり映像で確かめたりする。水が出ないだけでさまざまな困難が広がることを実感することが、この単元の出発点である。さらに「実は、私たちの町でも〇年前の夏に断水が続き……」などの事実を示し、水が使えなくなるという問題も、決して他人事でないことに気付かせる。

火を付ける段階では、各班に白い紙とその上に水の入ったA、B二つのコップを配る。それだけで子どもたちは興味を示す。A、Bを比べて気付いたことをまとめさせる。それを全体で共有する色や臭い、透明度、細かなごみや沈殿物等にも気が付きが広がる。「飲むとしたらどちらにしますか」と問い掛ける。

「実は両方とも君たちが飲んでいる水ですよ」と教えると「うえ〜！」と言いだす子もいる。浄水場の取水塔付近と、水道の蛇口から流れる水の写真を示し、どちらがどの水か知らせる。その後疑問カードを書かせてまとめると、この単元で子どもたちの学びたい内容が明確になる。同じ内容のカードごとに分類整理し、見出しを付けながら構造化すると、学習問題が明確になる。教師の学ばせたい内容と重なるとありがたい。学ぶ順番や、学び方を整理すると大まかな学習計画ができる。このようにしてテーマが決まれば、子どもたちは「自分たちの問題」として主体的な学びに取り掛かることになるのである。

学習の発展と学びの本質

この学習の発展として、総合的な学習の時間でSDGsの6番「安全な水とトイレを世界中に」を取り上げて学びたいくなるのも自然な流れである。総合的な学習（探究）の時間においても、上記のような問題解決的な学習過程、特に「学びに火を付ける」場面の研究や工夫をすることで、日本の子どもたちの主体的な問題解決力を一層高めていってほしい。

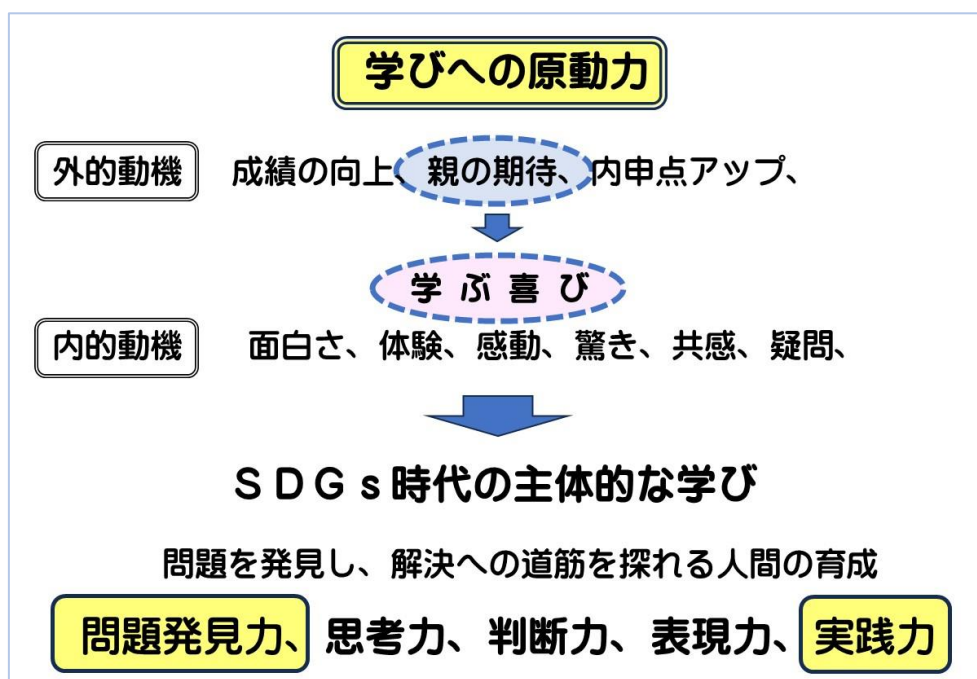
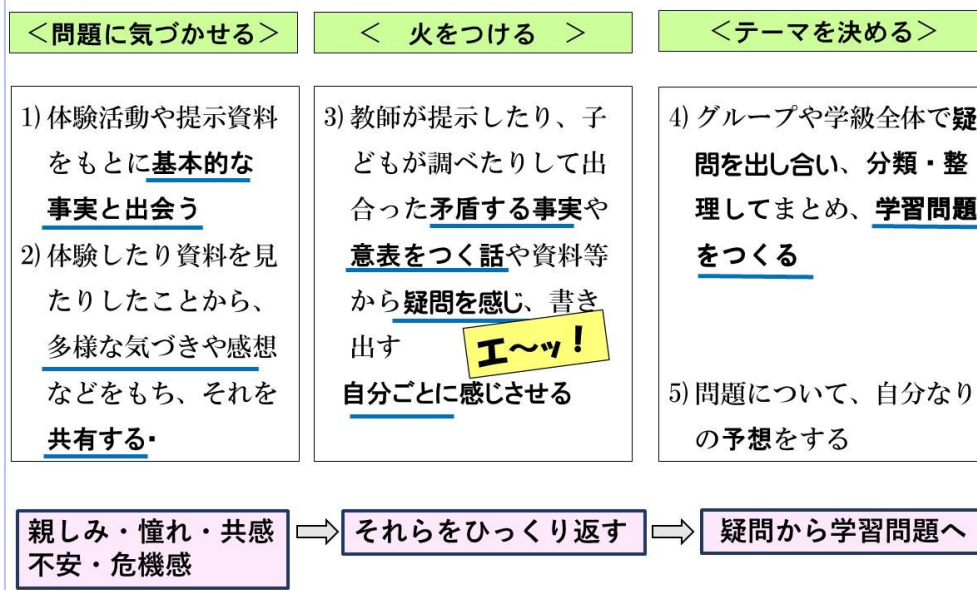
SDGs時代の教育をどのように創るかを考えるときも、私は1980年代の先輩校長古川清行氏の次のような言葉を思い出す。「本当の学習は、自ら求め、自ら探り、自ら納得して身に付けていくはずのものだ。そのために教師は、まず『分かりたい』という子どもの意欲を高めていくことに、最大限の努力をしていくことが必要だ」「子どもたちに目標を立てさせる際の指導で、留意することは、事実に基づいた具体的なものであること」「興味・関心と共に切実な必要感・価値観に基づくものであること」「解決への見通し（予想、順序・方法など）が持てること」である。また「日ごろからさまざまな場・機会を捉えて目標の設定をさせるようにすること」「仲間との生産的な触れ合いの場を通じて、協働の必要や協働のための方法、心構えなどを体認しておくよう導く」などの言葉は忘れ難い。

SDGsの時代であろうとも、教育者として学びの本質に向かう歩みを忘れてはならない。

各分野2000人超の講師が在籍!

講師派遣は時事セミナー

## 『こどもの学びに火をつける』際の3つのステップ



SDG s 時代の教育を学校で進める際には、

- ① 学習指導要領で示された「持続可能な社会の創り手」の育成という理念を踏まえ、総合的な学習の時間の目標との関連を図りつつ、各学校の**教育目標を明確にする**。
- ② **教科等横断的な視点**に立った資質・能力の育成（カリキュラム・マネジメント）
- ③ **主体的・対話的で深い学び**の実現に向けた授業改善

という3つの視点から教育の現状を見直し、具体的な取り組みを進めていくことが必要ですが、今回の記事ではその中でも③の主体的・対話的で深い学びを実現するにはどこに問題があるのか、どんな視点で進めたらいいのか、具体的にはどんな姿で実現できるのかについて書かせていただきました。①、②については、ここでは書いておりませんのでご留意ください。